芸豪烈伝その22

五月一朗（さつきいちろう）

「これからも新ネタに取り組みたい」

写真・森　幸一ほか　文・おさだ甚兵衛

節、声、啖呵は、いささかも衰えず、笑わせ泣かせて観客の心をとらえて放さないテクニック、60年を越えるキャリア。喜寿を迎えた五月一朗は掛け値なしの大看板、名人だ。

いまも新ネタに挑む姿は永遠の青年だ。若手への助言を聞いてみた。

「人生77年、山あり谷あり。浮き沈みもいろいろありましたが、これで食っていかなきゃと浪花節ひとすじで、やってきました」

一朗師の半生をつづった当誌の「晴ればれ五月ぶし」は14回つづいたが、短めにおさらいしよう。

☆浪花節ずきの久米一少年は京山小円嬢（初代）の一座に入ろうとするが果たせない（95年6月号）

☆寿々木米若に憧れるが、大阪で廣澤駒藏（初代）の弟子になる（同7月号）

☆駒月（こまげつ）という名前をもらうが、入門2年目に師匠の死に遭遇する（同8月号）

☆薬宣伝（浪花節をオトリに使った客寄せ商売）の座長に祭り上げられる。春日井梅鶯と変名をつけられたことも（同9月号）

☆三味線が弾けたので月給80円で台湾巡業に参加する（同10月号）

☆海南島（中国の南海の島）で腸チブスに罹るも命びろい（同11月号）

☆台湾で散髪したら頭の髪の毛が全部抜けてしまった。腸チブスの後遺症か――昭和14年ころ（同12月号）

☆四国の丸亀で入隊。芸人にあるまじき!?　奮闘ぶりが認められ上官に可愛がられる（96年1月号）

☆昭和20年、敗戦。浪花節かたりとして軍隊生活5年間は取り返しがつかない空白の時とは思ったが、京山小円嬢一座に参加。小円嬢の娘・雅子と結婚（同2月号）

さつき　いちろう。本名・岩野久米一（くめいち）大正8年(1919)年、香川県大川郡志度町うまれ。16歳で大阪の廣澤駒藏に入門。駒月の名前で初舞台「いかるが平次」を読んだ。戦後、大阪でのスターの座をなげうち上京。NHK専属となり全国に名を轟かす。五月一朗の芸名は、昭和15年の5月1日にレコーディングしたことから。日本浪曲協会相談役

☆義母・小円嬢が売出しに尽力（同3月号）
☆明治・大正期の名人、京山若丸の抱腹絶倒のエピソード（同4月号）
☆全国的に名前を売るために東京に進出。経済的基盤の確立のために小平市でそば屋を開業して大繁盛。精進の結果、NHK専属となる――昭和31年ころ（同5月号）
☆ハワイやアメリカ本土巡業のさいの秘話（同6月号）
☆村田英雄や鹿島秀月（先代）らも出演した浅草・国際劇場の舞台の思い出ばなしと後進へのアドバイス（同7月号）

とこうしてみると、一朗師の半生は浪曲の戦後史・芸能史だ。浪曲の「人間山脈」ともいえる。大阪と東京を「制覇」した桁外れな底力の一端が理解できる。

この取材でお会いした一朗師は、春風のように温かい自然体の紳士だった。そして、おはなしのひとつひとつが芸になっている。

「昭和28年ころですか、東京に来たんですが、イヤイヤだったんです。私は大阪で売れていましてね。浪曲親友協会の会長も松浦四郎、天光軒満月に次いで私か、という地位だったんです。

それが女房が私の荷物を全部、東京に送ってしまったんです。当時、家に帰るのは月に二日くらいでして。麻雀やらコレ（と小指をたてて）やらでね。女房もこのままでは私がダメになると思ったんでしょう。名を挙げるには東京だ、と。

今は東京に来てよかったと思いますけど、本当は来る気はなかったんです」

これは東京進出の事情を聞いた時の答えだが、仕方ばなしで声色をまじえ高座と同じように笑わせ、かつ貴重な事実を教えてくれる。時に乃木大将の荘重さで、時に『乃木大将伝　伊勢参り』の「支那忠」旅館の番頭のとぼけた味わいと、時に『太閤記』の秀吉のような苦労人が持つやさしさを持って。

話の内容は多岐にわたり、二代目寿々木米若の襲名を持ちかけられたり、NHKテレビの連続ドラマに出演したこと、当代の廣澤駒藏襲名に奔走したこと、これからも京山幸枝若のネタ（竹の水仙）に取り組みたい意欲など、このページでは収まりきれない質と量だった。「晴ればれ五月ぶし」の続編をお待ちください。

ボロ着ていても乞食じゃないよ寒椿（乃木大将伝）。だまされて心地よく咲く室（むろ）の梅（誉れの三百石）――と師から学ぶことは多い。「健康の秘訣？　呑気であまり神経を使わないんです」

おしまいに、若手へのアドバイスをきいてみた。

「これからの浪曲は若い人にがんばってほしい。いまは芸よりもマスコミの宣伝が先行しています。つい自分も上手になったのかと錯覚してしまう。辛辣な言い方ですが、浪花節を甘くみるなといいたい。

漫才、落語を聞き、お芝居を見て、どこでお客さんが泣くのか笑うのか勉強してほしい、盗んでほしい。

浪花節は古くはありませんよ。はやりすたりでなく、人間本来の不変の価値観に訴えるものなんですから」

一朗師が尊敬しネタももらった広沢瓢右衛門は88歳まで現役だった。一朗師がいまの若さを保って90歳百歳現役をと、浪曲一千万ファンは願っている。

昭和47年、新潟県巡業のスナップ。前列右から一朗師、木村若衛、初代・春日井梅鶯、浪花家辰丸。「一人前になるには『先輩を食い飛ばしたろか』という気概が必要ですわ」

浪曲… これほどすばらしい芸は他にはないと思います。
浪曲家の皆さん…頑張って下さい。
多くのファンを楽しませて下さい。

22/52

葛飾区・坂本豊吉